The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アジア太平洋論叢 第18号　序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2009, 18, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100081
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序

今年の初めに久しぶりにヴィエンチャン（ラオス）を訪れた。自動車やバイクの数が増加し、街を歩くのに少し気をつけねばならないが、やはりのんびりした雰囲気は十分に残っていた。メコン川沿いの古いホテルであるラーンサーン・ホテルから周辺を少し散歩してみた。ちょうど昼食時とも重なったので、麺類店に立ち寄った。座ってしばらくして気がついたのであるが、回りのテーブルから聞こえてくるのはほとんどがタイ語であった。どうやら、タイから車を運転しメコン川に架かる友好橋を渡って、小観光に出かけてきたらしく、家族連れが目立った。食事代を払う際、店員に「バーツでもいいか」と聞くと、「ああ、いいよ」との返事が帰ってきた。タイの通貨が、ほとんど問題なく流通しているといえよう。ホテルに帰って、バンコクから持参した携帯電話を試して見る。やはり、発信できない。ところが、現地滞在の長い友人の話によると、ホテルの中でも場所によってタイの携帯電話が使用できる場合があるという。もちろん、性能にもよるというが。部屋の中でテレビのスイッチを入れると、タイの放送がよく入る。5月には友好橋を利用してヴィエンチャン＝バンコク間の直行列車が運行されるという。そのためのラオス側の新駅がタイの援助もあって完成しているというので出かけてみたが、入国管理事務所を併設した立派な駅舎であった。

今日では、こうした現象は地球上のどこでも普通であろう。国境を越えてヒト、モノ、情報などが大量に行き交う時代である。行き交うものを、仮に経済的モノと文化的モノに分けるとすれば、厄介なのは後者である。たとえば、言語の問題である。ラオス語とタイ語は同一言語といえるぐらい近い関係にあるが、それぞれが独立した正書法と音声体系を持っており、背後にそれをシンボルとする国民国家が控えているわけである。とりわけ、攻勢を受けているラオスにとって、「独立国家」として政治運営を行なうためには、国内でのタイ語浸透とそれにともなうタイ文化の流入は好ましいことではない。ましてや、ヴィエンチャンの革命博物館に展示されている1980年代のタイとの国境紛争での「大勝利」の栄光を国民の共通言説とし、それを基盤として対タイ外交を運営しなければならない以上、文化的モノには神経質になるであろう。加えて、周知のように、ラオスの場合、国境を接しているのはタイだけではない。しかも、東西回廊や南北回廊といった構想のもと、国境を縦横断するルートがいくつも動き出している。いずれにしても、今日、「国境」の概念や機能が新しい挑戦を受けているように思えてならない。

2009年６月

会長　赤木　攻